

▶▶ シンポジウムの部

日本の図書館 21世紀への課題

～市民の自立と普遍性を追求するために～

図書館法制定50周年を記念するシンポジウムでは、宮城大学教授の山崎久道氏がコーディネーターとなり、作家の阿刀田高氏をはじめ4人のパネリストが図書館と社会の関わり、図書館の今後の課題などについて意見を交わしました。



出席者
パネリスト
阿刀田 高氏 作家、元国立国会図書館司書
竹内 愼氏 図書館情報大学名誉教授
常世田 良氏 浦安市立中央図書館長
岩淵 恵子氏 ボランティア、図書館利用者
コーディネーター
山崎 久道氏 宮城大学教授

で60%位と言われ、大変高いのです。アメリカではニューヨーク公共図書館のうち、中央図書館と科学産業ビジネス図書館を、そしてロサンゼルス中央図書館などを視察しましたが、いずれも200台、300台という、ものすごい数のコンピュータの端末が並んでいました。そこではデジタル化

が急速に進んでいて、インターネットはもちろん、300種類くらいの、本来は有料のデータベースも無料で利用できるようになっていました。

一方で特に印象に残ったのは、ロサンゼルス中央図書館の識字をサポートするコーナーです。アメリカは移民の国であることもあって、日本に比べれば文盲率は大変高いのです。そのため、英語の読めない人をサポートしなければなりません、図書館がその機能を担っているのです。私はそれを見たときに、アメリカの図書館の懐の深さをしみじみと感じました。

アメリカの図書館はデジタル化を強力に進めていますが、その一方でマンツーマンで接するサービスや本を使ったサービスも決して後退させてはいません。つまり二本立てなのです。このことがそのまま、これからの日本の図書館の課題になると思いました。山崎 今のお話から、自立した市民に対してきちんと情報を提供していくという、アメリカの図書館の底に流れている精神とも言うべきものを感じました。

しかし実は、日本でも古くから同じような考え方を持っていた面があったと思います。

図書館は時代の変わり目ごとに意識される

竹内 私は図書館とは世の中の変わり目ごとに意識されるものではないかと考えています。

日本で最初に公開された図書館は、奈良時代に、石上宅嗣(いそのかみのやかつぐ/729 - 781年)が自分の蔵書を公開した「芸亭(うんてい)」ですが、宅嗣が没した翌年(782年)には桓武天皇が即位し、平安の世へと、時代は大きく変わっていきます。

時代は飛びますが、江戸の後期(18世紀後半)にはたくさん

山崎 今、図書館を取り巻く世界は非常に大きな変革期に差し掛かっていると思います。一つは情報技術が進展し、さまざまなメディアが登場しているということです。第二に、生涯学習への関心が高まり、それが自立した市民を生み出す原動力となっています。また、宮城県は情報公開が非常に進んでいますが、私は図書館もその一翼を担う機関であると考えています。それでは、それぞれの立場から図書館について考えていってほしいこと、課題と思われることについて、お話しさせていただきたいと思います。

図書館は「社会のインフラ」

常世田 日本は今、「自己判断・自己責任」型社会へ移行していると言われていますが、正確に自己判断し、自分で責任を取るため

には、正確な情報を素早く入手しなければなりません。図書館はそうした情報を、誰でも公平に手に入れるための「社会のインフラ」として整備される必要があると、私は考えています。

今年の8月にアメリカの図書館を視察してきましたが、アメリカでは、図書館はまさに「社会のインフラ」としてしっかり定着していると実感しました。日本の図書館の利用率は平均で10～20%位であり、30%の市民が使えば大成功と言われています。しかし、アメリカの利用率は国全体の平均



常世田 良氏
とこよだ・りょう/浦安市立中央図書館長。1950年生まれ。和光大学人文学部卒、同専攻科修了。(社)日本図書館協会理事、千葉県公共図書館協会副会長などを務める。著書は『論集・図書館学研究の歩み』(共著)ほか。



竹内 愨氏

たけうち・さとる / 図書館情報
大学名誉教授。1927年生まれ。
米国フロリダ州立大学・ピッツ
バーグ大学図書館情報学部大学
院修了。図書館情報学で博士号
(ピッツバーグ大学)。著書に『コ
ミュニティと図書館』、編・訳書
に『図書館のめざすもの』など。

の個人蔵書家が現れて、その蔵書は私設図書館としての役割を果たすこともありました。事実、この時代の国学者・本居宣長（もとおり・のりなが / 1730 - 1801年）は「本は私蔵せず、人に見せ、写させるものだ」（『玉勝間』巻の一）と語っています。

仙台藩の「青柳文庫」は公共図書館のさきがけ

竹内 こうした今日の図書館につながる新しい動きや思想は、仙台で生まれたと言える面があります。

1765年に、仙台藩の林子平（はやし・しへい / 1738 - 1793年）は『富国建議（ふっこくけんぎ）』の中で「仙台藩を立て直すためには人材が必要だ。それには本をたくさん集めて、人々に読ませ、考えさせる施設を作る必要がある。その費用は税金で賄うべきだ」と建言しています。

林子平の提言はそのときは実現しなかったのですが、少し遅れて生まれた青柳文蔵（あおやぎ・ぶんぞう / 1761 - 1839年）が自分の蔵書2万巻を仙台藩に献納し、仙台藩にその運営を任せました。これが「青柳文庫（あおやぎぶんこ）」（1831年）で、日本における公共図書館のさきがけとも言われています。青柳文蔵は青柳文庫を運営するための基本財産もいっしょに寄付し、その運用で青柳文庫は維持されました。仙台藩もちゃんと目付2人を置き、今日の図書館員のような働きをさせたのです。

林子平や青柳文蔵は時代の変革期に生まれた人でしたが、こうした時期には新しいものの見方と、若い世代への期待の2つが現れてくると思います。

実は今年、制定50周年を迎えた「図書館法」（1950年）も変革期に生まれ、同じように新しいものの見方、考え方や人への信頼がうたわれているのです。

山崎 図書館法は何を目指したのでしょうか。

市民への信頼をうたう図書館法

竹内 図書館法は理念において大変優れた法律と言われており、国民一人ひとりが賢くなるのが民主主義の基本だという観点から立案されました。この法律では、図書館を国や自治体の“義務設置”にはしていません。私たちは「だから図書館が伸びない」と不平を述べた時代がありましたけれども、今となっては、住民が必要と判断したときに図書館をつくるという法律があることは、すばらしいことだと思います。義務設置では、「図書館があればいい」ということにもなりかねません。だからこそ、住民がまず「図書館というものがいいんだ」と思ってくれ



青柳文庫記念碑
公共図書館のさきがけとなった青柳文庫（1831年開設）の跡に立つ石碑（仙台市青葉区一番町・仙台中央警察署前）。青柳文庫の蔵書は、養賢堂蔵書とともに宮城県図書館の母体となりました。

ることが大事です。

図書館は、今までは資料や情報の提供が目的とされてきましたが、これからはもっと先の目標を設定しなければならないと思います。それを私なりに言えば、「図書館とは、市民一人ひとりが自立と普遍性とを求めて生きることを援助する機関」なのです。

いずれにしても、読書は若いころから習慣にすることが一番だと思います。これについて、阿刀田高先生のエッセイの一つに「読書保険」（『まじめ半分』 角川書店 1984年）という言葉が出てきます。この意味は、ぜひご本人にお聞きしたいと思います。

大事な機能は図書館間の連携とレファレンス

阿刀田 「読書保険」という言葉は思いつきでしたが、内容は重要です。つまり保険は老後を豊かにしてくれるものですが、これは普通、お金の面を言います。しかし精神の豊かさもあるわけで、若いころに、保険料を払うように読書という習慣をちゃんと身につけておけば、その見返りに、後々の人生を豊かにしてくれると、そういう意味です。

図書館について、私が一番申し上げたいのは「図書館は役に立つ」ということです。最近、杉並区にある私の家のすぐ近所に高井戸図書館という、小さな図書館が新設されましたが、蔵書は私の書棚の方が豊かな部分があります。私は小説を書くための必要もあって、1万冊位の蔵書を持っていますから。けれども、この高井戸図書館もちゃんと役に立つのです。

それはなぜかという、杉並区では区立図書館のネットワークが整備され、図書館間の連携が非常に良いからです。高井戸図書館自体の蔵書は少ないのですが、ちょっと離れたところに戦前からの歴史を持つ杉並区立中央図書館があって、高井戸図書館でお願いした本は、だいたい次の日の夕方ぐらいには中央図書館から届くのです。

また私は、図書館の命はやはりレファレンスワーク（調査相談の機能）にあると考えています。利用者のいろいろなニーズに対して鋭敏に応えることのできる、親切で有能な調査相談担当職員がいるかどうかということが、図書館にとっては非常に重要なことです。山崎 実は宮城県の図書館設置率は極めて低



阿刀田 高氏

あとだ・たかし / 作家。1935年生まれ。早稲田大学文学部卒。国立国会図書館司書を経て作家デビュー。1979年『来訪者』で日本推理作家協会賞、『ナポレオン狂』で直木賞、1995年『新トロイア物語』で吉川英治文学賞受賞。著書は『メトロポリタン』など多数。



宮城県図書館協力車
市町村図書館に本を届ける宮城県図書館の協力車。県内の図書館等はネットワークシステムで結ばれていて、平成11年度は本館から市町村図書館等に約12,000冊が貸出されました。



岩淵恵子氏

いわぶち・けいこ / 1954年生まれ。小牛田町在住。小牛田町図書館での絵本の読み聞かせボランティアや宮城県点字図書館朗読奉仕員など、ボランティアとして活躍。小牛田町民生委員児童委員。

いのです。宮城県には71市町村ありますが、そのなかで図書館があるのは10市10町に過ぎません。阿刀田先生のお話にあったように、宮城県のどこか一つの町に図書館を一つつくれば、その背後には県の図書館があり、宮城県の中のいろいろな図書館がネットワークを結んで、相互に協力し合うこととなります。そして最後は国会図書館が拠り所となって、すべての図書館に本を貸してくれるわけです。続いて岩淵さんからお話しいただきたいと思います。

利用者側からの働きかけも大切

岩淵 私の住んでいる小牛田町には「近代文学館」という図書館があって、何か本を読みたいとか、CDを聴きたいとき、そして時間のちょっと空いたときなど、いつでも気軽に利用しています。図書館が近くにあると、暮らしが充実して、心も豊かになるような気がします。

私は宮城県点字図書館（仙台市青葉区）で、目の不自由な方のために録音テープを吹き込んだりする朗読奉仕員もしています。この朗読奉仕では、目の不自由な方にとって、音声が生字の役割を果たすことになり、正確で聞きやすく読むことが要求されます。読み落としや読み誤りがあると原本とは異なるものになってしまうので、そのために下読みだけでなく、下調べをきちんと行うようにしています。

それで、小牛田町の図書館に足を運ぶ回数が多くなりますし、レファレンスサービスを頼りにすることもしばしばです。電話やファクシミリで、宮城県図書館のレファレンスサービスを受けることもあります。こうした図書館のサービスはすべて無料ですが、これは本当に素晴らしいことだと思っています。

また、私は小牛田町の図書館で、毎週土曜日に子どもたちを集めて、絵本の読み聞かせをしています。これはボランティアですが、図書館サービスの提供者の立場であることを意識して行っています。それだけにそこでの利用者の反応は自己反省の材料であり、また何よりも大きな励みになっています。こうした活動を積み重ねているうちに、利用者は図書館側から受けるサービスに期待するばかりではなく、利用者の側からも、図書館との間に良い相互関係を働きかけていくことが、より良い図書館づくりにつながると考えるようになりました。

自分たちのまちの図書館は自分たちでつくる時代

山崎 最後に一言ずつ、まとめをお願いします。

竹内 岩淵さんから図書館のサービスについてお話がありましたが、私は、サービスを担う図書館員には図書館員としての人間観が必要だと考えています。それは、一人ひとりの利用者は成長の可能性を持っているという、人間観です。結果はいつ出てくるかはわからないのです。岩淵さんがお話しした読み聞かせの結果が現れるのは、20年後ではないでしょうか。お話を聞いた子

どもが親になり、自分の子どもの読書の問題に出会った時に初めてわかることと言えるでしょう。「読書保険」についても、小さいときから種を蒔いてくれる人がいて、その種がだんだん育って、かなり時間が経ってから、あなるほどわかるものです。図書館の仕事も、20年後、30年後、80年後を見通して考える視点が大切だと思います。

常世田 イギリスに「有権者は自分のレベルに合った政治家しか持てない」という格言がありますが、私は「市民は自分のレベルに合った図書館しか持てない」と言いかえられると思います。

これからは地方分権、地方自治、の時代です。自分たちのまちの図書館は自分たち自身でつくるという時代になると思います。いろいろな図書館があることを知って、どのような図書館にするのか、判断してほしいと思います。

岩淵 これからも図書館の役割はますます大きくなっていくと思いますし、頼りにしたいと考えています。そして私も、まだまだ自分に「読書保険」を掛けていきたいと思いますが、子どもたちにも、もっともっと本を読んでもらいたいですね。

阿刀田 図書館というのは、率直に言ってコスト計算に合うものではないと思います。例えば、私がかつて勤めていた国立国会図書館は都心の一等地にあります。あんな大きな建物を全部駐車場にしたらどのくらい儲かるのかというわけです。

しかし図書館は、例えば1000人の人が来たとして、その中からたった一人がものすごく世の中に役立つことをしたら、そのことを喜びとして良いと思います。そのくらい開き直って、これからも大きな視点で図書館の価値を捉えていくべきだと、そう考えています。

知恵の力を育てるのは図書館の役割

山崎 今日は情報化時代といわれています。インターネットから溢れるようにして、毎日、情報がどんどん出てくる。その中にはあまり質の良くない情報や、人間の尊厳を危うくするような情報すら含まれていると思うのです。これからは自分自身で、そういう情報の良し悪しを見分けていかなければいけない時代です。

今日のシンポジウムを通して、その溢れ出る情報をコントロールするのは、結局、人間の持っている知恵の力であり、人間の持っている知識の確かさではないのかと思いました。そして、その知恵や知識の確かさを育ててくれるのは、図書館ではないかと考えられます。

今日のシンポジウムを契機に、図書館についての理解が一層深まり、図書館を充実させていく力が、ますます大きくなっていくことを期待して、まとめとしたいと思います。今日はありがとうございました。

（敬称略。記事は要旨。文責 / 宮城県図書館）



山崎久道氏

やまざき・ひさみち / 宮城大学事業構想学部教授、同大学総合情報センター長。1946年生まれ。東京大学経済学部卒。東北大学より博士号（情報科学）。公職に国立情報学研究所総合目録委員（歴任）、宮城県図書館協議会副会長など。著書は『専門図書館経営論』ほか。